
加也ちゃんの戦争

星棕歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

加也ちゃんの戦争

【Nコード】

N9073X

【作者名】

星棕歩

【あらすじ】

私、加也は兄様が大好き。兄様に喜んでもらうために、今日もがんばらなくっちゃっ！さあ、甘い時間を独り占めするための、恋の大作戦、スタートよっ！！

「戦争が終わるかもしれないんですって、兄様」

私は空をじっと見上げる兄に優しく話しかけた。

「きっと、負けるんでしょうね。ふふっ」

それはある暑い夏の日のこと。

「……………」

夏は好きだ。兄との思い出がたくさん詰まっている季節。二年前に兄が戦争に取られた日も、今日のように暑かった。

「兄様。御加減はいかがですか？」

兄の額に浮かぶ汗を丁寧に拭いながら、私は兄の顔を覗き込んだ。

「……………」

ただ空の一点を見つめる兄。きっと、私が口に出す言葉の意味なんか、もうお分かりにはならないだろう。それでも、私の声は覚えていて下さる。私はそれがたまらなく嬉しかった。

「今朝ね、叔母様が氷を持ってきてくださったのよ。あとで一緒にいただきましょうね」

変わり果てた兄の姿を見た時、私は叫び声をあげ、号泣した。何日

も何日も、兄をこんな目に合わせた敵国を、戦争を、そして祖国を、馬鹿げた争いをする人間を。恨んで恨んで、喉が破れて血を流し、声が出なくなるほどに罵った。

一年前の夏のことだ。

「さあ、戻りましょうね」

私は兄の乗る車いすを押し、来た道を引き返した。豊かな自然に囲まれたここは、兄の心と体を癒すには最適だ。街から遠く離れたここに兄をお連れしようと進言したのは、私。家族や周囲からの多少の戸惑いも見受けられたけれど、つきっきりで看病をして差し上げるからと強く主張する私の様子を見て、皆は一樣に肩をすくめるのみだった。

私は知っている。皆は兄を疎ましく思っていた。

「兄様。暑くはありませんか？ 加也は暑うございますよ。ふふっ」

もう何も答えては下さらない、木偶人形と同じ兄。けれど、それが何だというのだろう。兄様は以前と同じように私のそばにずっといてくださる。誰も邪魔する者はない。そう考えるだけで、私は幸せでたまらないのだから。

「着きましたよ、兄様。さあ、階段をお上りになって。加也が肩をお貸しします」

兄に体を添わせると、熱い鼓動が私の中に伝わり響く。ああ、昔と同じ……兄様はどきどきと懸命に脈打ち、私の想いに答えて下さるうとしている。兄様、わかっていますよ……私は……加也は……兄

様の事を全て知っているのですよ……。

「……………」

前を一心に向く兄は、きっと、今でも何かをご覧になっているのだ。私は幼少のころから、そんな兄の懸命さがとても好きだった。勉強に励まれ、皆に愛され、両親一番の自慢だった兄様。私は、兄の妹だというだけで、誇らしくてたまらなかったものだ。なのに、戦争が兄を変えてしまった。きっと大きな武勲を上げて凱旋して戻る、そんな両親の期待は、失望に終わり、やがて兄への憎悪へと変わった。

「兄様。窓を空けましょう。ほら、いい風」

兄をベッドに横たえ、私はそばにある椅子に腰掛けた。

兄は空が好きだ。遠くの山々では緑が映え、鳥たちが楽しげに歌を奏でている。ええ。兄様、今ご覧になっている、そちらの方角が私たちの生まれ故郷です。今はもうすっかり焼けてしまつて、何も残っていないのですよ。お父様もお母様も、姉様も弟たちも、骨も残らないほどに。これを兄様に伝えたら、驚かれるかしら、ふふっ。

「……………」

「いい気分……」

兄と私の時間。永遠の時間。言葉なんていらない。兄はもう私のもの。ああ……戦争って素敵……。

「ちょっと、いいかね、加也君」

お医者様が病室に入ってくる。

「はい。何でしょうか」

この方のおかげで、兄はとても穏やかな日々を過ごしている。私がとても信頼している先生。

「兄上のね、精神は……回復は難しいと思うんだ。残念なことだ」

「そうですか……」

「だが、脚は、何とかなるかもしれんないよ」

「……どういう……ことでしょう」

「よい義足があるそうだ。腕の方は無理だが、脚は、義足があれば歩ける。兄上も、片足は正常なのだから、自力で歩きたかろう」

「はい。兄も喜ぶのではないですか」

「では、病院に紹介状を書こう。ここでは、ろくな治療ができないからね」

「……移るのですか」

「ここより遙かに設備の整った大きな病院だ。心配することはない。ご両親が莫大なお金を遺してくださっているから、治療費も問題はないだろう。加也君も今までご苦労だったね」

「……………」

お医者様が部屋を出て行かれた後も、私は考えていた。兄様の脚が戻る。仮初であったとしても、兄様にはほんの少しの自由が戻る。遠くの街で、兄様の自由が戻る。

「嫌です。加也を置いていかないで」

突然脳裏によみがえったのは、二年前の暑い日のこと。兄は優しく微笑むと、必ず帰るからと、大きな手で私の頭を撫でた。そう。そうして、約束通り、兄様は帰っていらしたのだ。私のそばにいてくださるために。

「……………」

兄は知っていたのだ。戦争の不自由さを。だから、こんな姿になって、私の元に帰るしかなかったのだ。ああ、兄様、加也は、兄様の想いに答えなければならぬ。

「兄様。何も心配はいりませんよ。ふふっ」

私は病院を抜け出し、走った。何度も転びながら、押さえつけられるような痛みを胸に感じながら、懸命に走った。そして、小さな洞穴に入る。

「はあっ……はあっ……」

そこには小さな無線機が置いてある。私が隠しておいた敵国製のもの。必死に息を整え、そして大きく息を吐くと、私は無線機の受話器を取った。

「……こちら甲八零八号、爆撃地点を進言いたします……」

女学校でほんの少しだけ学んだ敵国の言葉。兄に少しでも追いつきたくて、独力で勉学を重ねてきた。加也の成長を見て、兄様は喜んでくださるかしら。

「……三月二十日一八〇〇進言の爆撃地点より南南東におよそ四十七キロ、標高二百三十メートル及び百八十二メートルの小山を超えた先に位置する山村であります」

私は周りの情景を思い浮かべながら説明を続ける。兄と毎日通った道。何もかもがいとおいしい。

「……前回のごとく目印を立てておきます。決行は今夜を提案いたします。以上」

受話器を置いて、ため息をつく。これでいい。果たせなかった兄に代わり、私が武勲を上げる。皆だつてそれを待ち望んでいたのだから。そのために喜んで死んでいったのだ。

「……………」

もう使うこともない無線機を見つめた。私はふらつきながら近くにあった大石を持ち上げると、無線機に思いきり投げ落とした。

「さあ、急いで戻りましょう。兄様の元へ」

私は気が遠くなりかけるのを必死にこらえながら、兄のいる病院へと戻った。

「先生。兄の調子が良くないのです」

「そうなのかね？　またあの時のように……」

「はい……襲うのです……」

「……鎮静剤を打とう」

「いえ、今は落ち着いていますが……今夜、ここに留まっていますか？　私一人では不安なので……」

「そうか……では、私は医務室にしよう。何かあったらすぐに呼んでくれたまえ」

「ありがとうございます」

今夜、兄と私は永遠に添い遂げる。私は来たるべきその時に思いを馳せ、幸福感のために胸の高鳴りを抑えることができなかった。

「……………」

「兄様。加也は、兄様のおそばにいますよ。ずっと、ずっと」

「……………」

「お喜びくださいな」

「……………」

「ふふっ、兄様……」

兄がかつてそうしてくれたように、私は兄の頭をそつと撫でた。その瞬間、辺りが光で満たされる。

ああ……素敵……私……戦争って大好き……。

(後書き)

純愛っぽいの習作

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9073x/>

加也ちゃんの戦争

2011年11月13日18時17分発行